

準備委員会企画シンポジウム 7

阪神淡路大震災の子どもへの影響

企画・司会者 秦 一士 (甲 南 女 子 大 学)
辻 平治郎 (甲 南 女 子 大 学)
話題提供者 後 藤 容 子 (和 歌 山 大 学 教 育 学 部)
伊 藤 進 二 (芦 屋 市 立 潮 見 小 学 校)
大 前 稔 (神 戸 市 立 本 庄 中 学 校*)
井 上 幸 子 (兵 庫 県 スク ー ル ・ カ ウ ン セ ラ ー)
指定討論者 井 出 浩 (神 戸 市 児 童 相 談 所)
林 春 男 (京 都 大 学 防 災 研 究 所)
浅 川 潔 司 (兵 庫 教 育 大 学)

*現在神戸市立飛松中学校

【企画の趣旨】

1995年1月17日未明の阪神淡路大震災は物的にも人的にも未曾有の破壊・損傷をもたらし、心理的にも深刻な影響をもたらした。“PTSD”が一時期流行語になったことは周知の通りである。しかしその後4年余を経て、老人、障害者、失業者などにはなお震災の影響が見られるとしても、子どもにはほとんど見られなくなった。しかし仔細に観察すると、震災による心的問題がすべてなくなったわけではなさそうだし、現在に至るまでの問題の変遷や消失過程なども十分に解明されたとはいいがたい。そこで本シンポジウムでは、学会が被災地神戸で開催される機会でもあるので、震災の子どもへの影響について検討してみようと考えた。

初めに司会者の秦が、最近の兵庫県教育委員会による児童・生徒に対する震災の影響調査について、その概略を報告し、全体のオリエンテーションを行った。続いて4人の話題提供者が以下の報告を行った。

I. 乳幼児への発達の影響

後藤 容子

芦屋市において、平成7年から9年の「3歳児心の健診」の受診者とその養育者を対象に、受診して約1年後に郵送調査を行った。被災時の子どもの年齢は胎児から3歳まで。ここで特徴的であったのは、郵送にもかかわらず調査票の回収率が高く、自由記述欄への記入が多かったことで、母親の震災関連ストレスが育児不安につながり、それが子どもの問題に2次的な影響を与えているらしいことが推測された。

乳幼児自身の身体状況、言語、対人関係、情緒的状态等について、震災直後の変化とそれ以後の継続的变化(3ヶ月～2年後)を尋ねたところでは、「眠りが浅い」「揺れに敏感になった」「音に敏感になった」「1人で寝られ

ない」「父母のそばを離れない」「暗いところを怖がる」等の変化(症状)が、乳幼児の3～5人に1人に見られた。また、その現われ方には以下のような傾向が認められた。①時間経過により症状の変化に違いがある。②たとえば暗がりの恐怖などは物的被害、人的被害の大きいほど症状の発現率が大きく、時間が経過しても消失しにくい。③被災時の年齢によって症状が異なり、被災時の年齢が高いほど情緒的問題の発現率が高く、年少の乳児では食や睡眠等の生活習慣の難しさが継続していた。

II. 小学生の実態

伊藤 進二

芦屋市是最激震地域であったが、潮見小学校は芦屋浜の埋立地に林立する高層住宅街にあり、学校にも校区の住宅にもあまり大きな被害はなかった(せいぜい半壊程度)。しかしそれゆえに、大きな被害を受けた周辺地域からの転入が多かった。

そのような子どもの中に、教室に入れない2年生が2名いた。転入時、A男は教室の周りをウロウロし、みんなが昼休みで教室を離れている間に、給食を食べに入ってきていた。B子は母親から離れられず、登校しても母親の足にしがみついていた。しかし、保健室や別教室を利用して他児を引入れて遊ばせたりしているうちに、4年生になると教室に入れるようになった。

次に、昨年行ったアンケート調査を紹介すると、幼少期に被災した子どもたちにも震災の影響が見られ、震災時に3歳と7歳であった小2と小5に震災について話したがない子が多かった。また、2年では1人でトイレに入れない、寝られない、電気が消せないといった問題、5年でも物音にびくびくする、トイレの戸が閉められない等の退行的な問題が続いていた。

III. 心のケアが必要な中学生の実態

大前 稔

この3月まで最激震地域の本庄中学(生徒数920～30名中死亡者10名。家屋の全壊20%、半壊38%、一部損壊26%)に勤務した経験とそこでの調査結果を述べる。

まず不登校について。もともと全欠の生徒が1クラスに1人くらいはいたが、震災直後はこれが激減。ところが3年目になって小6で被災した子が中3になったところから再び不登校やその傾向を示すものが増加。次の学年が中3になると不登校傾向はさらに増加し、今年も同じ状況が続いている。欲求不満耐性の減少が著しく、いやなこと、しんどいことがあるとすぐ学校を休む、遅刻す

るなどの傾向が強くなっている。

また、問題行動を示す生徒も少なくはなかったが、震災後は彼らも「死んだ友達もいるのだから頑張らねば」といって問題を起こさなくなり、卒業式にも全員が落ち着いて出席。しかし3年目になると、再び問題行動が出現。学校内ではあまり問題を起こさないが、学校外での喫煙、深夜徘徊、薬物乱用(シンナー)、窃盗等が増加。震災前の生徒にはパワーがあり、指導をしても手応えがあったが、今の生徒にはそれがなく、教師に突っかかってくるようなパワーが見られない。震災と関係があるのかどうかは分からないが、彼らには人間関係(対教師、対友人)のしんどさが見て取れる。

IV. スクール・カウンセラーの立場から 井上 幸子

被災地(淡路島・北淡町)のスクール・カウンセラーとして'95年6月23日に赴任したが、この時点で既に震災の痕跡はきれいに片付けられていた。学校の先生は子どもたちは皆元気だし、PTSDなどというものが起こりうるのかといわれた。親をなくした子どもまでが「皆頑張っているのだから、自分も頑張らねば」と作文するような状況。これでは「夢ではないか→いや現実だ」というような現実の確認もできないし、弱音も吐けない。それゆえ、服喪や癒しの作業はできないのではないかと思われた。実際、養護の先生に聞くと、何か分からないがしんどいという生徒がいるとのことで、このような生徒にはできるだけ体験を話させるようにした。

保健室の統計を見ると、震災後1・2年目は利用者がそれほど増えていないが、胃痛、鼻炎など具体的な問題や考えられないような原因の骨折が増加。ケンカも多く、捻挫、打撲、切り傷が増加。3年目には利用者が急増し、だるいとか風邪症状など不定愁訴のようなものが増える。また、震災の影響かどうかは分からないが、4年目に中2女兒が集団ヒステリーを起こしたり、男子中学生が傷つけるという意識をもたずに女兒の容貌をからかうというような未熟な行動が見られた。

V. 討論

井出：PTSDの診断基準で不可欠なのは恐怖体験の反復想起であるが、このような症状はほとんど見られなくなった。しかし、話題提供の中にもあったように、身体症状などは必ずしも減少していない。震災の直接的な影響というのかどうかは分からないが、二次的なストレスの蓄積なども考慮されるべきだろう。

林：震災の影響というと、危ない子はいないかと探すことばかりがなされる。しかし、この体験を納得できるように整理し、将来のバネにできるような援助が必要で

ある。また、現場での分からない、教えてほしいという声に対して、学界・研究者は答えを提供できねばならないし、次の災害に生かせるよう研究成果を世界に発信して行かねばならないが、それができていない。

浅川：物理的環境、人的環境、社会文化的環境との間のバランスが急激に破壊されるのが災害。こういう状況ではやたらに頑張る人が出て来たりする。このような危機は危険であると同時に、乗り越えられれば新たな展開が可能になるので、この両面を念頭において介入することが必要。

VI. まとめ

子どもに見られる上記のような問題行動は、多くが震災のない地域の子どものにも認められる。それゆえ、これらの問題は震災の影響によるのか、それとももっと一般的な社会や子どもの変化を反映しているのかがはっきりしない。このだれもが悩まされる問題の存在は最初から分かっていたので、企画者は、話題提供者にはできるかぎり対照群との比較検討をしていただきたいと事前をお願いしておいた。しかし、そういうシステムティックな研究は、林のいうように、きちんとした研究チームでも組まないかぎり、個々の研究者や教師のレベルでは不可能である。企画段階ではこのことに理解が及んでいなかった。反省してお詫びしたい。

しかし、このような企画の不備にもかかわらず、本シンポジウムでは以下のような共通の認識をもつことができた。①震災による被害の大きさ、被災時の年齢や発達段階、その後の時間経過、家庭の経済的負荷などによって異なるが、震災の影響と見られる問題行動は4年余を経過した現在もなお続いている。②乳幼児では被災体験をどう受けとめられているのか分からないが、その影響と思われる問題行動が認められる。③被災体験の言語化がうまくできない小学生では退行現象が生じやすく、形を変えながら現在まで続いている。④中学生くらいになると、被災後2年くらいは落ち着いているように見えても、3年目になると我慢して貯めこんでいた問題のリバウンドともいいうる現象が生じている。⑤いずれにしても、これを乗り越えて行くためには、体験を話したり表現したりすること等が必要。なお、今後さらに現象をできるだけ正確に記述して、そのデータを蓄積していくことが必要であり、それを防災に生かせるようにしなければならない。

参加者はあまり多くなかったが、活発な議論がなされた。紙数の制限でその多くが掲載できなかったが、ご容赦願いたい。